彦根市埋蔵文化財調査報告 第2集

品井戸遺跡

═ 調査概要報告書 ═

昭和56年3月

彦根市教育委員会

序

県下における埋蔵文化財の発掘調査は，すでに年間100件を越え，たえずどこかで調査が実施されている状態であります。

彦根市におきましても経済活動の進展とともに開発が進み，ここ数年来発掘調査が実施されるに至り，今まで知られていなかった貴重な事実が明らかになりつつあります。

過去の人々が残してきたものを，未来に語り継ぐことが現代に生きている私たちの務めでありましょう。さらには，歴史から学んだものを明日に生かすことが，私たちの課題であると考えます。

「地方の時代」といわれる今こそ，彦根のたどってきた歴史を見つめ，地方という言葉の意味を問い直してみる必要があるのではないでしょうか。

このような意味で，本書が地方史の研究資料として，少しでも寄与できますならば幸いです。最後になりましたが，彦根市土地開発公社をはじめ，品井戸遺跡の発掘調査にご理解とご協力をいただきました多くの方々に深く謝意を表します。

昭和56年3月

彦根市教育委員会

教育長　河　原　保　男

例　　言

1. 本書は，彦根市土地開発公社が計画した第2次福満団地造成工事に先だつ埋蔵文化財包蔵地の緊急発掘調査の概要報告書である。

1. 本遺跡は，小字名をとって「品井戸遺跡」とした。

1. 調査は，彦根市教育委員会が主体となり，昭和54年度は，彦根市埋蔵文化財発掘調査団が実施し，昭和55年度は彦根市教育委員会が実施した。
発掘調査事務は，彦根市教育委員会社会教育課が担当した。

1. 本書に掲載した遺構の実測およびトレースは，調査協力員 林 定信が主に担当した。

1. 調査は，滋賀県教育委員会文化財保護課・近藤滋技師の指導・助言を得て，現地指導は，彦根市教育委員会社会教育課技術員・本田修平が担当した。

1. はじめに

今回発掘調査を実施した品井戸遺跡は，彦根市西今町字品井戸60番地先に所在する。

当遺跡の周辺は 昭和40年度の滋賀県遺跡目録には福満遺跡・竹ケ鼻廃寺が知られているだけで当遺跡は知られていなかった。

現在，この付近はすでに，卸売市場，福満団地等の造成がなされ，急激に市街化が進んでいる。また，国鉄東海道線彦根・河瀬両駅の中間にあたり，南彦根駅（仮称）の建設が計画され，これと同時に，彦根市土地開発公社による第二次福満団地の造成が計画された。

この宅地造成計画に伴う事前審査の段階での現地の確認調査は，県教育委員会文化財保護課の手によって実施された。この確認調査で遺物の散布地であることが確認され，埋蔵文化財の包蔵地であることが判明した。

以上の経過を経るなかで今回の発掘調査が計画され，昭和54年12月4日から発掘調査着手に至った。

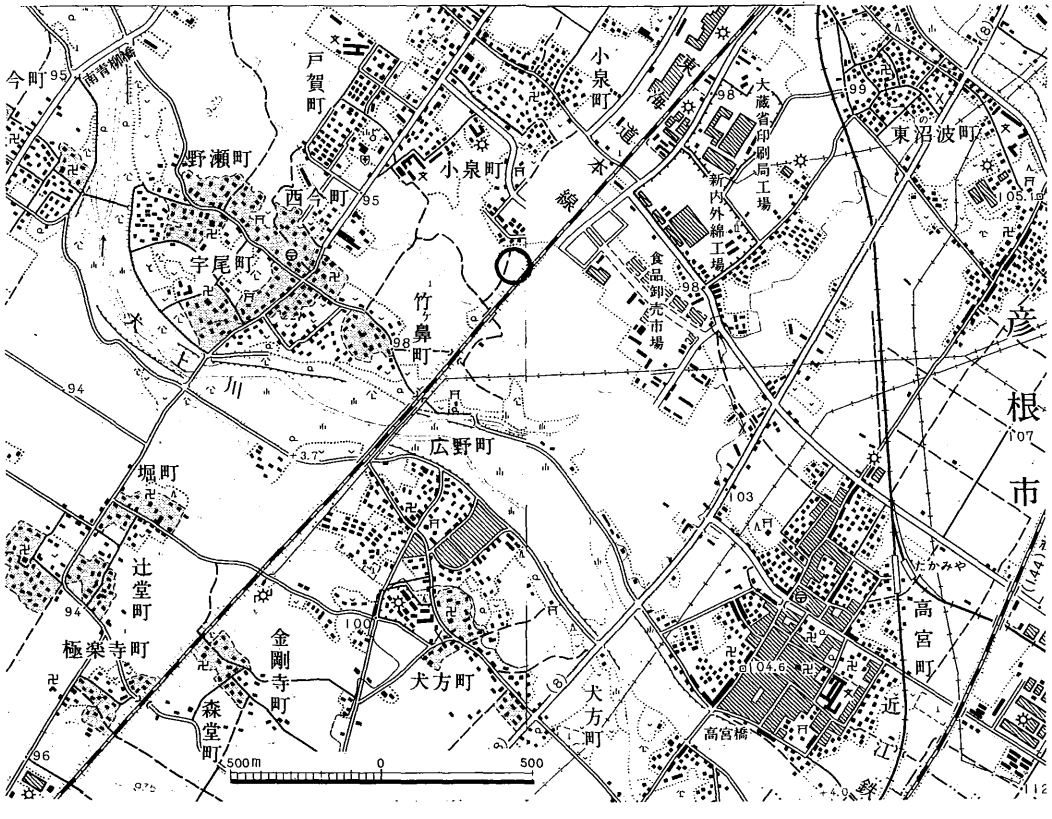
2. 位 置 と 環 境

琵琶湖の中央部に位置する彦根市は，湖岸線と平行して北上する北陸往還，鈴鹿山脈北端と伊吹山系の間の地峡部を抜ける中仙道を合わせるネック部分にあたる。この中仙道は，琵琶湖にそって横にのび彦根市を横断するかたちで通る。

彦根市の平野部は，愛知川・宇曽川・犬上川・芹川の沖積地とデルタより形成されている。この4つの河川とその間を流れる小河川により，平地は波状の弱い凹凸の地形をなし，その微高地は古代よりの生活の場所として人々に利用されてきた。

品井戸遺跡は，犬上川右岸中流部に位置し，地番は西今町であるが，位置的には，竹ケ鼻町と小泉町の中間にあたる。

犬上川は，その源を鈴鹿山系に発し，沖積平野を形成しながら北流して琵琶湖へと注ぐ。この犬上川が国鉄東海道本線をくぐり抜けた所で，竹ケ鼻の集落が所在する微高地に阻まれわずかに西



図版1　品井戸遺跡位置図　（1/25000）

流する。この地点の北側には，小川の流れる低地や農耕用の取水井戸があり，ある時期には，犬上川の河道であった可能性や後背湿地であった可能性が考えられる。さらに北側には，小泉の集落が所在する微高地があり，品井戸遺跡はこの微高地に立地していると考えられる。また，弥生時代後期の土器の出土で広く知られる福満遺跡は，当地点から約200m下った同一の微高地に立地しており，同一の遺跡になる可能性が考えられるが，現時点では遺跡の内容が不明であり将来の問題点としておきたい。

彦根市の平野部における遺跡は，各河川の自然堤防等の微高地上に立地する遺跡と琵琶湖および内湖の湖岸に位置する遺跡に分けられる。品井戸遺跡は，前記したように河川自然堤防の微高地に立地する遺跡の典型と考えられる。犬上川の両岸には同様な立地を示す遺跡が多く存在する。

現在知られている周辺の遺跡を以下に記すと，福満遺跡は，前記したように品井戸遺跡と同一の微高地に立地すると考えられる。しかし，弥生時代後期の土器を出土した地点は，現城南小学校校地の地下1mと深く，このことから考えれば遺跡周辺の土器が溜った包含層からの出土と考えることも可能であろう。竹ケ鼻廃寺は，現在の犬上川の自然堤防上に立地し，複弁蓮華文軒丸瓦を出土しており，白鳳時代の寺院跡と考えられる。寺域内の南端と考えられる国鉄東海道本線を越えた地点には，式内社である都恵神社が所在する。

品井戸遺跡より約2km東には，同じく複弁蓮華文軒丸瓦を出土し，白鳳時代の寺院跡と考えられる高宮廃寺がある。

また，竹ケ鼻廃寺と品井戸遺跡の間には，現在竹薮になっているが地元の人が「椿塚」と呼ぶ所がある。ここは東海道本線の路床をつくる際，石室があり須恵器片が出土したと地元で言われている。現状では，周囲に一段低い湿田があり，周濠を持つ可能性が考えられるが，その実態は不明である。現時点では，一応出土したといわれる須恵器から古墳時代後期の古墳と考えられる。

以上が，品井戸遺跡周辺で知られている犬上川北岸の遺跡群であるが，寺院跡が存在していることから見て，白鳳時代までにこの地域の文化が相当進んでいたことが考えられる。このことは，犬上川の後背湿地に田を開き，微高地上に集落が位置する人文地理的風景を想像させる。

3. 調 査 の 目 的

今回の発掘調査の対象面積は約18,000㎡におよぶ。現地の大部分は田であり，高低差は１ｍ前後であるため，その全域から遺構が検出されるとは考えられなかった。

なお，県教育委員会による現地の確認調査の段階でも，遺物の散布地であることは確認されていたが，遺跡の実態については，全く不明の状態であった。そこで，発掘調査の主要な目的を遺物を出土する包含層の有無においた。また，包含層が確認された場合は，その広がりと時期を確認することとした。このような目的から，調査の方法としては，散布地にトレンチを設定するトレンチ掘りとした。

各トレンチを精査して遺構が検出された時は，その時点でトレンチを拡張して遺構の全容を明らかにすることとして調査を実施した。

4. 調 査 の 結 果

トレンチは，調査地区全体をカバーするように設定し，その総数は22か所におよんだ。

地形的に調査地区を大きく分けると，竹ケ鼻と小泉の集落間で一番低く小川の流れる所を南端とする低湿地に近い湿田の地区と，第1次福満団地としてすでに宅地造成されている所を中心とする微高地とに分けられる。その最大比高差は約1mである。

土層は，前述した2地区間で大きく変わり，湿田を中心とした地区の土層は，耕土を取り去ると第2層の黄褐色粘質土層になる。この層は，田の床土であり，若干の中世の遺物を主体とする包含層であるが，遺物の量は極めて少ない。第3層は，青灰色粘土層であり，青磁・白磁等中世の遺物を下限とする包含層である。この包含層中一番古い遺物は，縄文時代晩期の深鉢片であるが，量的には数点と少ない。量的に多い遺物は，弥生時代の末期から平安時代末期までのものである。第4層以下は，旧河道もしくは氾濫原と考えられる土層であることがW－3トレンチで確認された。すなわち第4層が砂層，第5層は濃灰色粘土層であり，このいずれもが遺物を含む包含層であった。その時期は，平安時代末期を下限とするもので，中世を含まない点で第3層との違いを示す。他の遺物は第3層と同様である。これ以下の層は，湧水が激しく，またトレンチ壁面の崩壊によって調査することができなかった。

以上のような土層を示すトレンチは，3，5，6，W－1，W－3，W－4，W－5，W－9の各トレンチである。

微高地の土層は，第2層の黄褐色粘質土は同じであるが，第3層は黄灰色粘質土層となり，この面で遺構と考えられるピットや溝が検出された。この層は地山と考えられ，無遺物層である。W－10トレンチは，3層以下が茶褐色の植物遺体を含んだいわゆる「スクモ層」であったが遺物は含まれていなかった。

以上のような土層を示すトレンチは，1，2，4，W－2，W－6，W－7，E－1，E－2，E－3，E－4，E－5の各トレンチである。遺構の検出されたトレンチは，W－2，6，7，9，2トレンチの5か所である。このうち，W－2，6，7，9トレンチから検出されたピットは，一部に遺物が入っていたが，ピット相互に何等の規則性も見出し得なかった。このことから考えれば，地山の凹みに包含層の土が落ち込んだものと考えられる。

W－1トレンチで検出された溝は，砂がつまっており遺物は含まないことから自然流路と考えられる。また，W－6トレンチの溝は，巾50cm，深さ50cmほどで北東から南西に走るものである。遺物は，緑釉陶器他の極少量が入っていた。このことから平安時代末期を下限とするものであるが

その性格は不明である。３トレンチから検出された遺構は，掘建柱の建物跡である。この建物は，２間×２間の総柱の建物である。柱間は桁行1.9ｍ，梁間1.4ｍであり主軸は，ほぼ南北である。第２層の状態より考えれば，その時期は中世を下限とするものであるが，遺物がほとんどないためにその時期を決定することはできない。

以上のような調査結果から考えるなら，調査区域の大半は犬上川の激しい氾濫のために土砂の堆積した沖積地である。この沖積作用とともに包含層は形成されたものであり，この意味で今回の調査区域の大半をしめる包含層は二次的な包含層ということができる。このように考えるなら，包含層に含まれる遺物は集落跡から氾濫のたびに押し出されて溜まり込んだものである。

しかし，遺物の磨滅がほとんど認められないことは，この附近に集落の中心地があることを予想させる。また１棟ではあるが建物跡が検出されたことは，この予想を裏づけているといえよう。

5. 出 土 遺 物

縄文晩期 —— 土師器

○ **深 鉢**（図版６－１，２）

１は，やや内傾して立ち上がり，口縁外面端部に凸帯を回らす。凸帯は，上下から指で押さえているが，刻みは施さない。胎土は，砂粒を含み粗い。色調は，灰褐色であり，焼成は軟である。調整は，器表の磨滅が激しく不明である。口径は23 cmが復元された。

２は，外反して立ち上がり，口縁外面端部に凸帯を回らす。凸帯は，調整時のものと同一の原体で刻みを施しており，条痕が残る。調整は，内面上半部と外面を二枚貝か植物の茎によると思われる条痕が残る。口径は17 cmが復元された。

出土地点は，１がW－３Ｔ第４層であり，２がW－５Ｔ第５層である。

○ **壺**　（図版６－３，４）

３は，外反して開き端部に面を作る。この端面に円形浮文を２個１組として貼りつけた痕跡を残す。調整は，口縁部が内外面横ナデであり，頸部は内外面ともにハケ調整である。胎土は砂粒を含みやや粗いが，焼成は硬である。口径は15.8 cmを計る。

４は，大きく外反して開き，端部は垂下して口縁帯を作る。調整は，器表が磨滅しており不明であるが横ナデと思われる。胎土は若干の砂粒を含むが密であり，焼成は軟である。口径は19.6 cmを計る。

出土地点は，３がW－３Ｔ第３層であり，４はW－４Ｔ第２層である。

○ **甕**　（図版６－５～10）

５・６は，いわゆる受け口状口縁の甕で，口縁部下半に櫛状工具で列点文を施し胴部上半に凹線を刻むが，６は磨滅が激しく不明である。５は，淡白黄色を呈し器肉はやや厚く，口径は18.4 cmを計る。６は，褐黄色を呈し器肉は薄く，口径は17.8 cmを計る。

出土地点は，５・６ともにW－３Ｔ第３層である。

７・８は，いわゆる北陸系の甕で，口縁を上方に引き上げ外面に凹線を刻む。調整は，口縁部が内外面ともに横ナデであり，胴部内面は横方向のヘラ削りである。出土地点は，７がW－１Ｔ第４層で，８がW－４Ｔ第４層である。

９は，単純「く」の字口縁の甕で，やや内彎しながら立ち上がる。調整は，内外面ともにハケ調

整である。出土地点は，W－1T第4層である。

10は，いわゆる布留式の甕で やや内彎しながら開き端部内面を肥厚させる。調整は，口縁部が内外面ともに横ナデで，胴部は外面ハケで内面横方向のヘラ削りである。出土地点は，6T第3層である。

○ 甑　（図版6－11）

体部は直線的に開き，端部を丸くおさめ，底部に1孔をうがつ。調整は，器表の磨滅のため不明であるが，底部外面は指でおさえて成形する。出土地点は，W－3T第3層である。

○ 高 坏　（図版6－12）

柱状部はしぼっており，脚部はラッパ状に開き，透かしを3孔うがつ。調整は，内面が横ナデであり，外面はヘラ磨き調整である。出土地点は，W－3T第4層である。

○ 埦　（図版6－13）

体部は内彎して開き，口縁はやや外反して立ち上がる。端部内面には沈線を入れ，口縁部内面には暗文を施す。調整は，内面ヘラ磨き，外面ヘラ削りと思われるが，器表が磨滅しており不明である。出土地点は，W－3T第3層である。

○ 坏　（図版6－14）

口縁部はやや外反しながら開き，端部内面に沈線を入れる。調整は，内外面ともに横ナデ調整である。出土地点は，W－3T第3層である。

○ 甕　（図版7－15）

口縁部は，端部を上方に引き出すいわゆる近江型長甕の系譜を引くものである。把手がつけられており，底部の穴は焼成後穿たれている。調整は，口縁部が内面ハケで調整されており外面は横ナデ調整である。胴部は，内面ハケ調整，外面上半部がハケ調整で下半部にヘラ削りを施す。出土地点は，6T第4層である。

須恵器

○ 横 瓶　（図版7－16，図版8－17）

口縁は，やや外反して開き端部を上方に引き上げる。調整は，口縁部が内外面ともに横ナデであり，胴部はタタキ痕を残す。出土地点は，16・17共にW－1T第4層である。

○ 甕　（図版8－18）

口縁は，やや外反して開き端部内面を肥厚させる。調整は，頸部・口縁部内外面横ナデ調整であり，胴部はタタキ痕を残す。出土地点は，W－1T第4層である。

○ 短頸壺　（図版8－19，20）

19は，やや外反して開き端部内面を肥厚させ，胴部に一条の凹線を入れる。調整は，内外面ともに横ナデである。

20は，有蓋の可能性があり，口縁はやや内斜して立ち上がり，胴部はやや扁平な丸底を成す。調整は，内外面ともに横ナデである。

出土地点は，19がW－1T第3層であり，20はW－3T第3層である。

○ 坏蓋　（図版8－21～26）

21・22は，丸みを帯びた天井部と丸くおさめる端部を持ち，21はヘラ記号を有する。調整は内外面ともにロクロナデでヘラ起し痕が残る。出土地点は，21がW－3T第3層であり，22がW－5T第2層である。

23～26は，宝珠撮みがつき，端部を面取りして掛け部を作る。調整は，内外面ロクロナデである。出土地点は，23～25がW－1T第3層で，26がW－1T第4層である。

○ 坏身　（図版8－27～31）

27は，深い体部と内傾しながら立ち上がる端部を持つ。調整は，内面と外面上半部ロクロナデで外面下半部ヘラ削りである。

28は，ほぼ平らな底部と小さな立ち上がりを持つ。調整は，内外面ロクロナデで，底部はヘラ起し痕を残す。

出土地点は，27がW－5T第3層であり，28がW－1T第4層である。

29～31は，平らな底部から体部は直線的に立ち上がる。内外面ロクロナデ調整であり，底部にヘラ起し痕を残す。

出土地点は，29がW－1T第3層，30がW－5T第3層，31が6T第6層である。

○ 埦　（図版8－32）

弱くふんばる高台から内彎して開く体部に横に引き出された口縁部を持つ灰釉陶器の埦である。内外面ロクロナデ調整で，高台は張り付けである。

出土地点は，W－6Tで検出された水路中である。

○ 皿　（図版８－33）

半円形の高台から弱く内彎して開き，口縁部は強いナデを入れる。内外面ロクロナデ調整である。

出土地点は，W－１Ｔ第３層である。

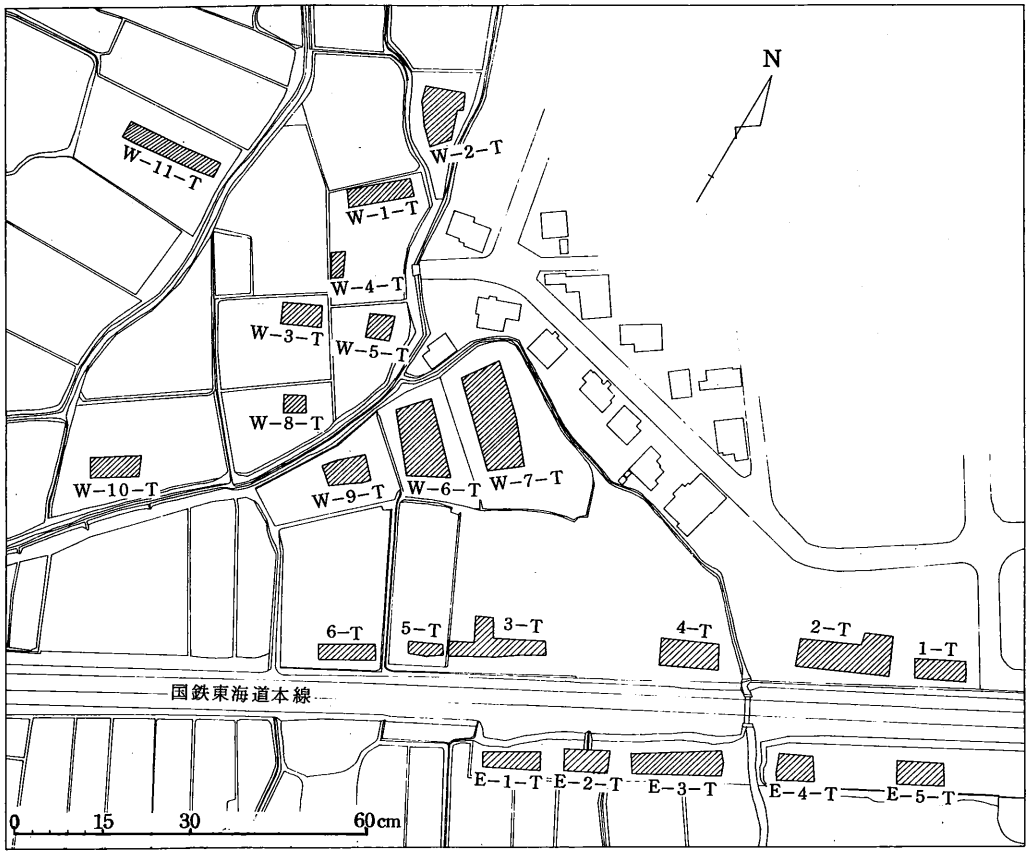
○ 土 錘　（図版８－34，35）

中型の土師質の土錘である。出土地点は，６Ｔ第３層である。

○ 瓶　（写真図版５－36）

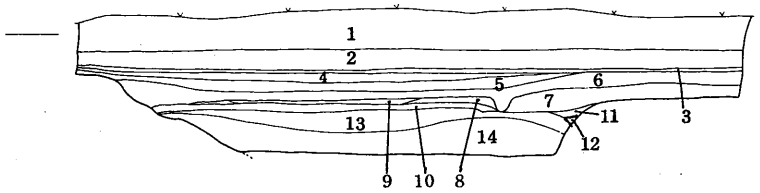
瓶の体部を再利用したもので，穴を木の栓で詰め，液体の容器としている。内容物は，漆と思われる。

出土地点は，W－１Ｔ第３層である。



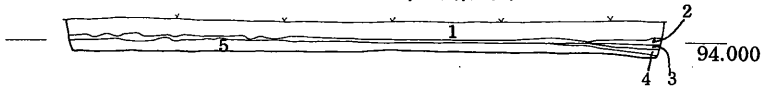
図版２　　品井戸遺跡トレンチ図

6トレンチ　西壁断面図



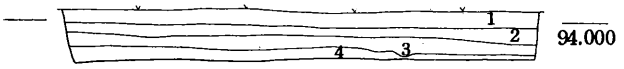
1. 盛土
2. 耕土
3. 明黄褐色粘質土層(床土)
4. 黄褐色粘質土層
5. 淡黄褐色粘質土層
6. 茶褐色粘質土層
7. 灰褐色粘質土層
8. 灰色粘土層
9. 淡茶褐色粘質土層
10. 砂礫混青灰色粘土層
11. 褐茶色粘質土層
12. 礫層
13. 砂礫混青灰色粘質土層
14. 灰色砂礫層

W－10トレンチ　東壁断面図



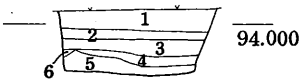
1. 耕土
2. 明黄褐色粘質土層(床土)
3. 砂混黄褐色粘質土層
4. 黄茶色粘質土層
5. 礫混灰茶色粘質土層

W－3トレンチ　東壁断面図



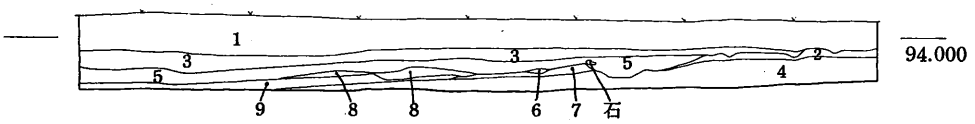
1. 耕土
2. 明黄褐色粘質土層(床土)
3. 砂礫混淡茶灰色粘質土層
4. 黄褐色粘質土層

W－4トレンチ　北壁断面図



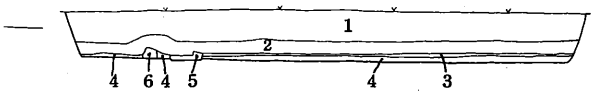
1. 耕土
2. 明黄褐色粘質土層(床土)
3. 礫混淡茶灰色粘質土層
4. 砂混淡黄褐色粘質土層
5. 暗青灰色砂質土層
6. 砂礫混茶褐色粘質土層

W－1トレンチ　西壁断面図



1. 耕土
2. 明黄褐色粘質土層(床土)
3. 礫混淡黄灰色粘質土層
4. 黄褐色粘質土層
5. 淡茶灰色粘質土層
6. 淡茶灰色砂質土層
7. 青灰色粘質土層
8. 黄茶色砂礫層
9. 暗青灰色砂質土層

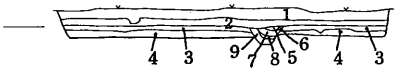
図版３　　主要トレンチ断面図



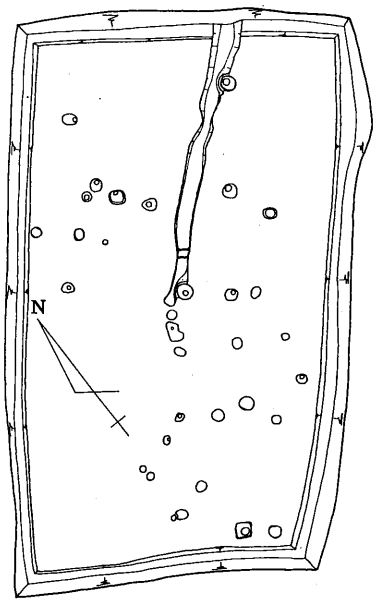
96.000

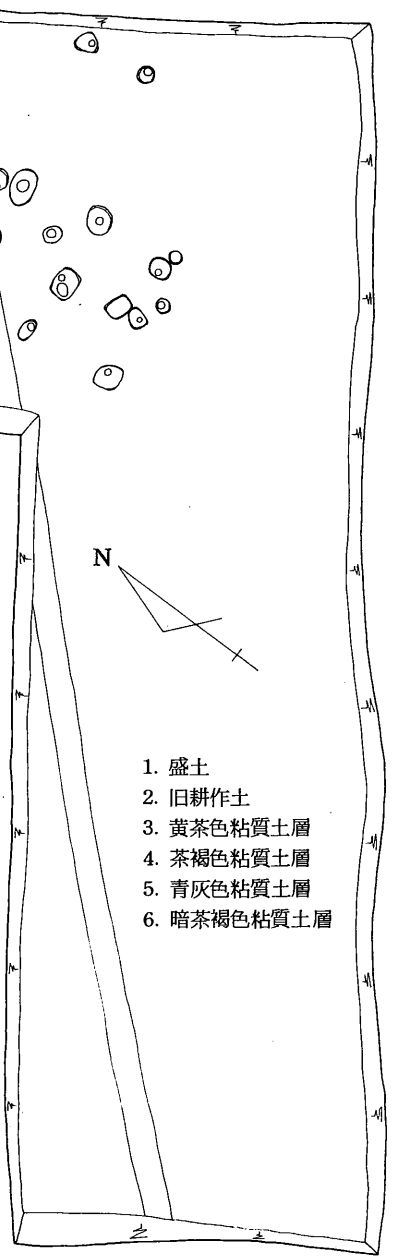
1. 耕土
2. 床土
3. 黄褐色粘質土層
4. 灰茶色粘質土層
5. 灰黄色粘質土層
6. 淡灰黄色粘質土層
7. 暗黒茶色粘質土層
8. 暗灰茶色粘質土層
9. 暗灰黄色粘質土層

W－9 トレンチ
平面図及び東壁断面図



95.000





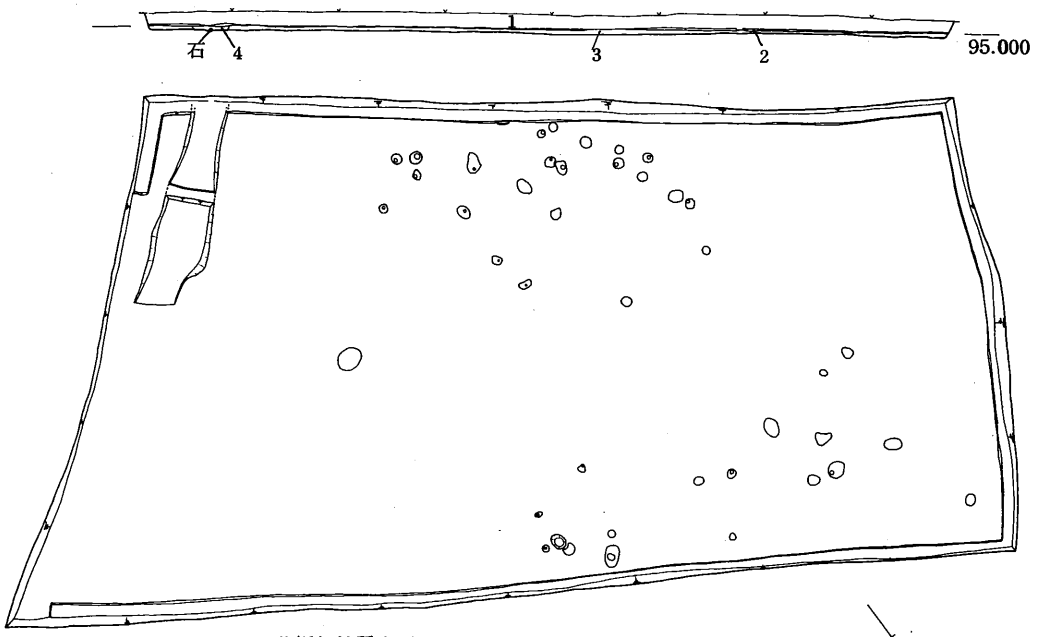
1. 盛土
2. 旧耕作土
3. 黄茶色粘質土層
4. 茶褐色粘質土層
5. 青灰色粘質土層
6. 暗茶褐色粘質土層

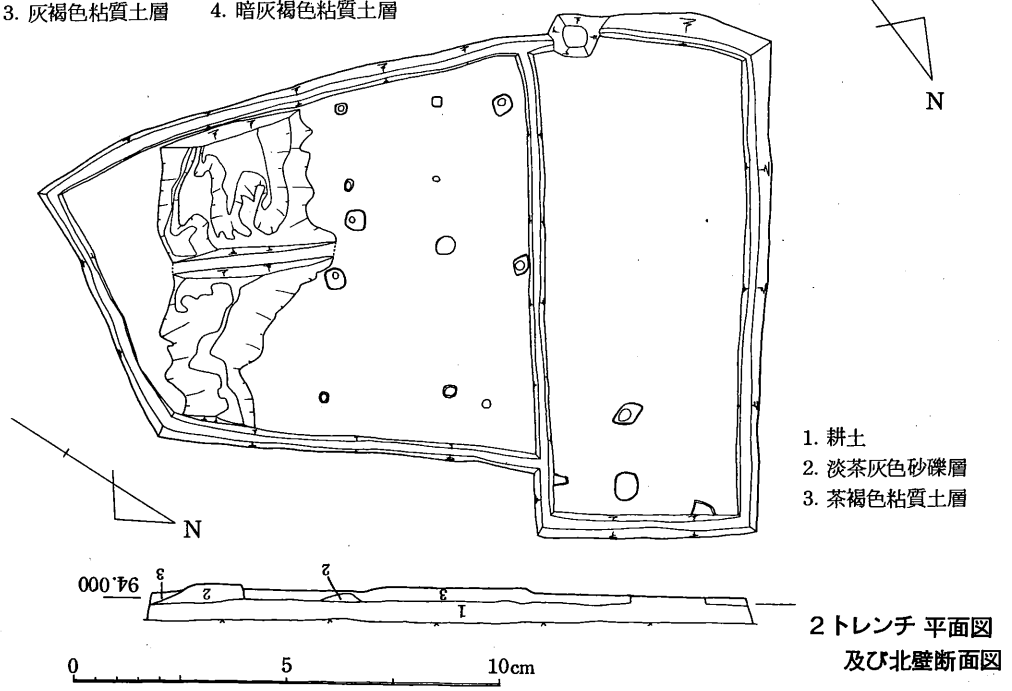
0 5 10cm

W－2 トレンチ
平面図及び東壁断面図

図版 4

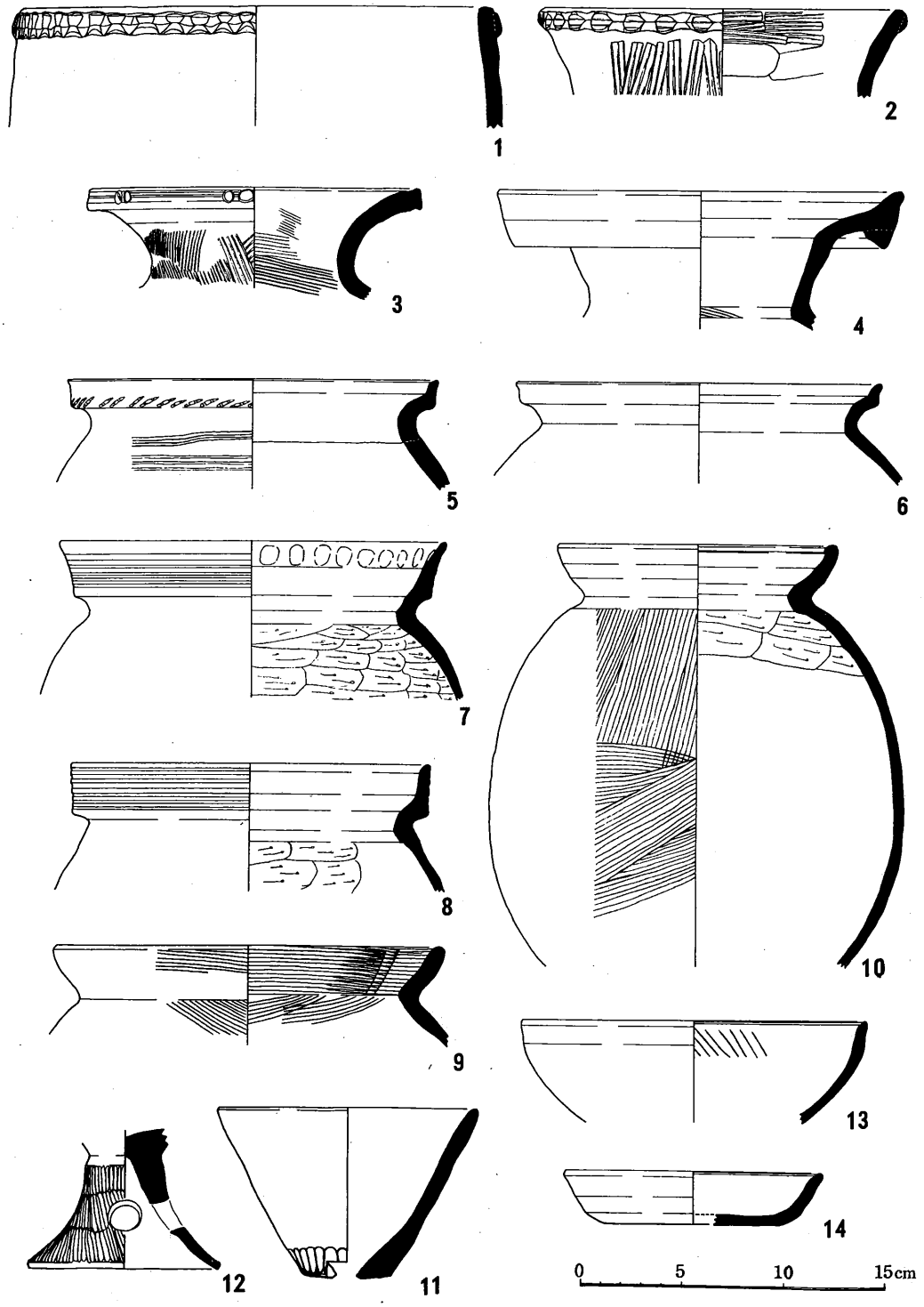
W－６Ｔ　平面図及び南壁断面図



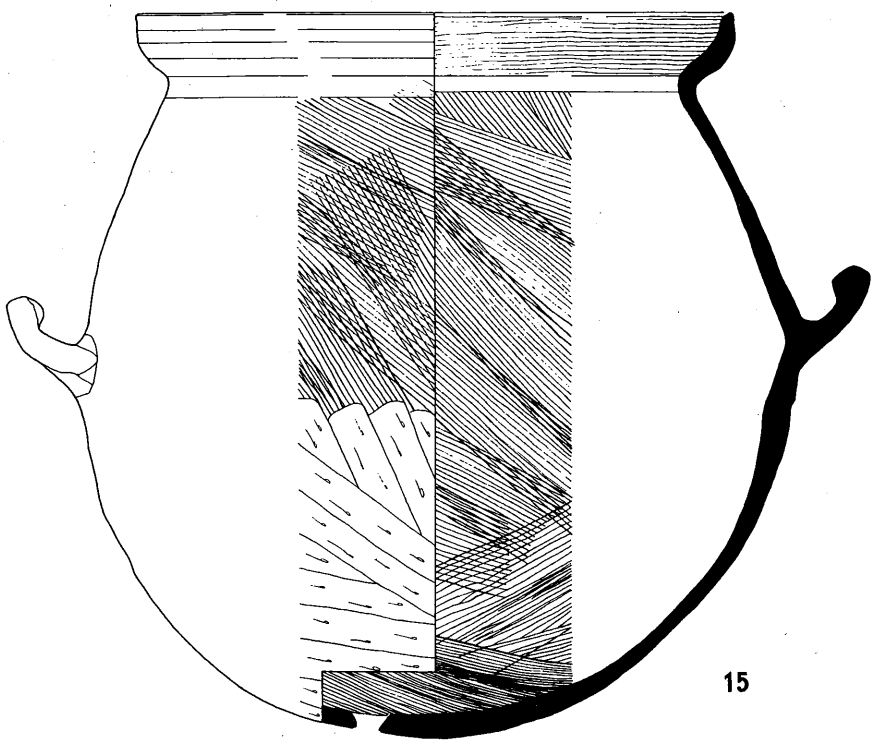


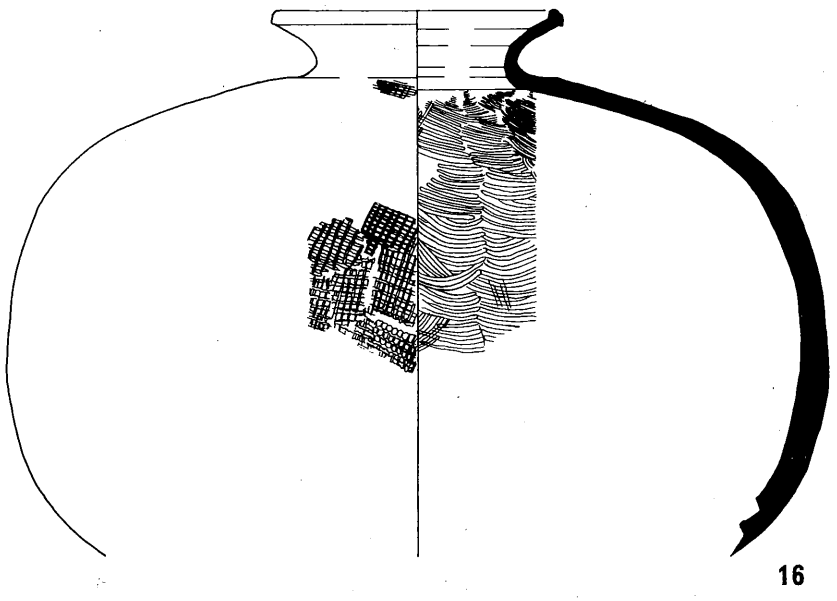
２トレンチ 平面図
及び北壁断面図

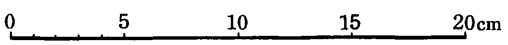
図版５



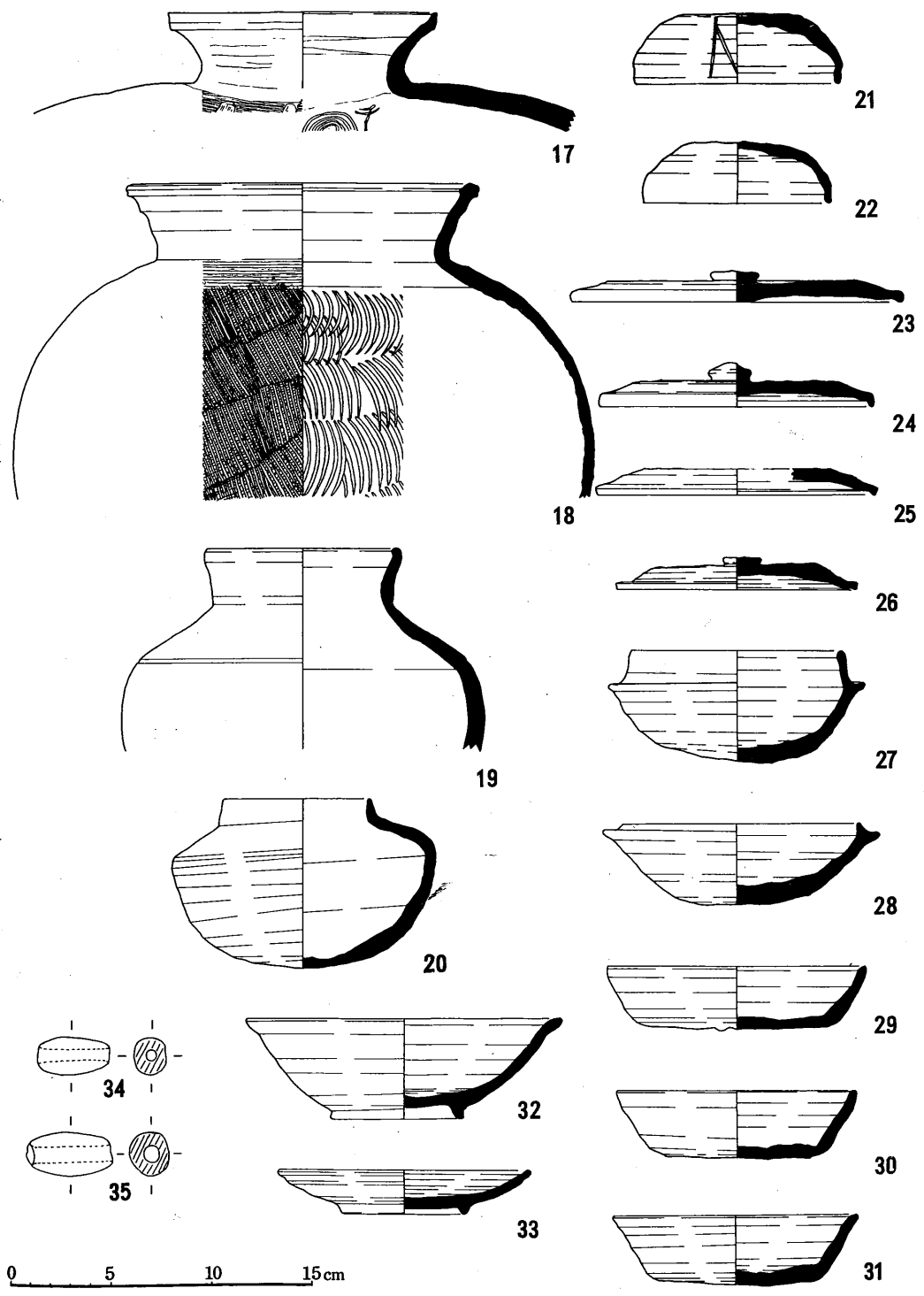
図版 6



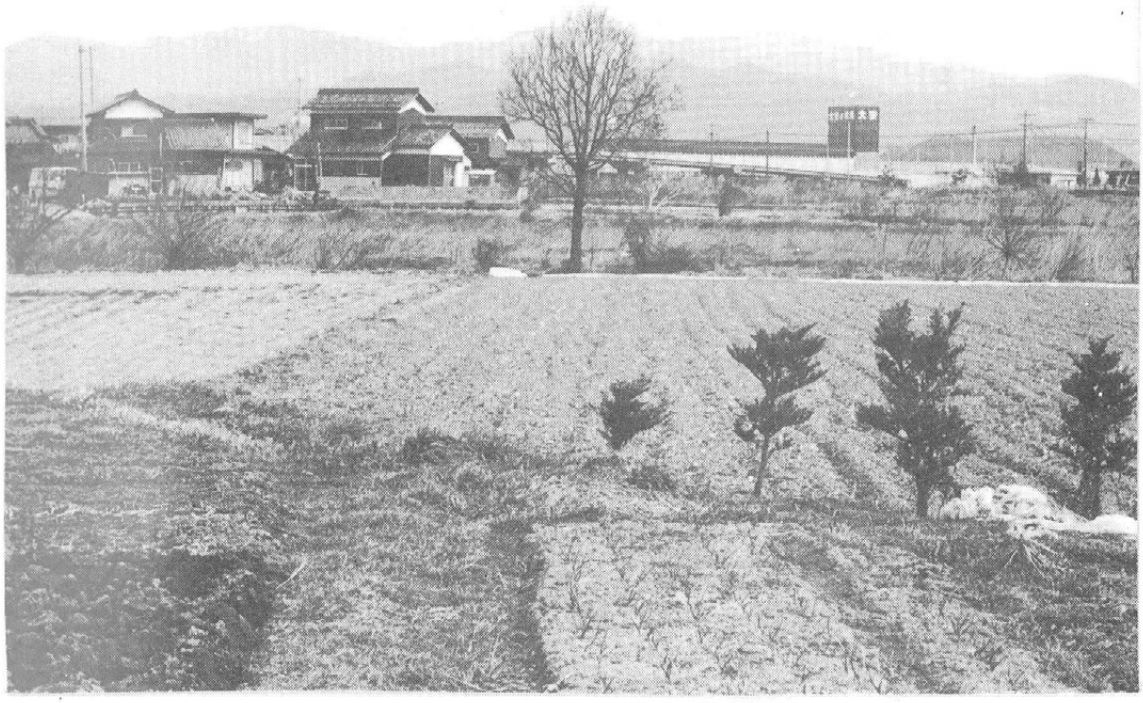




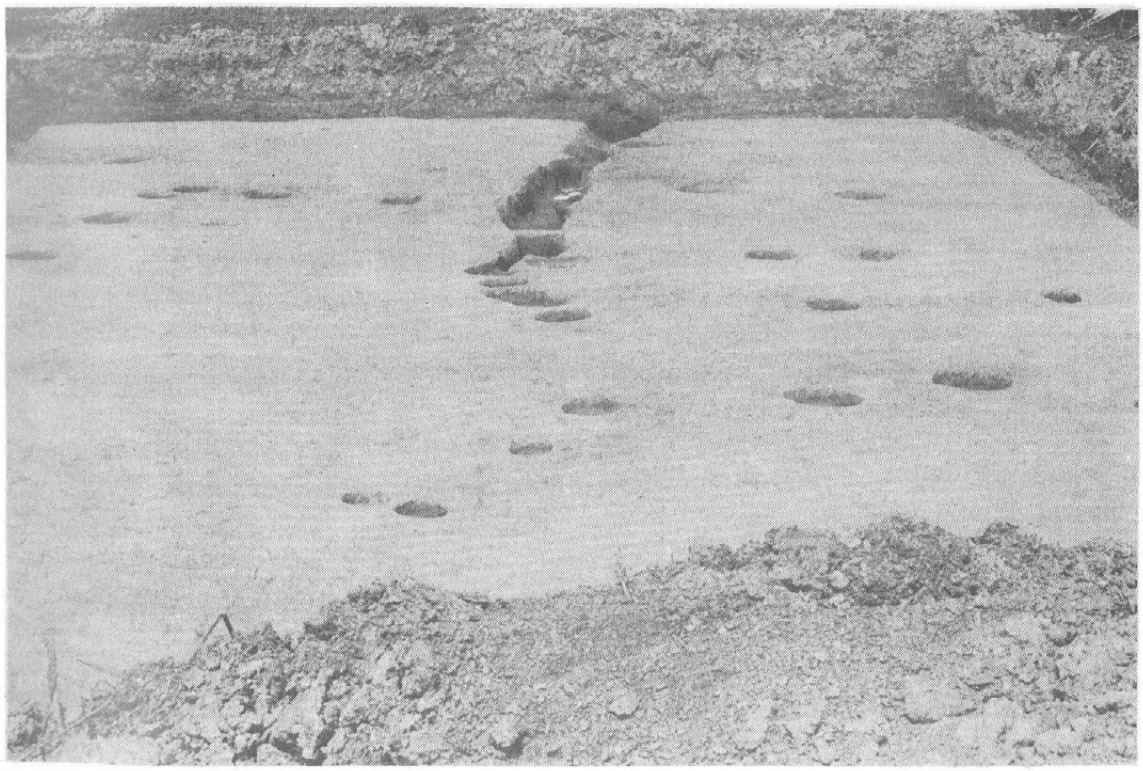
図版 7



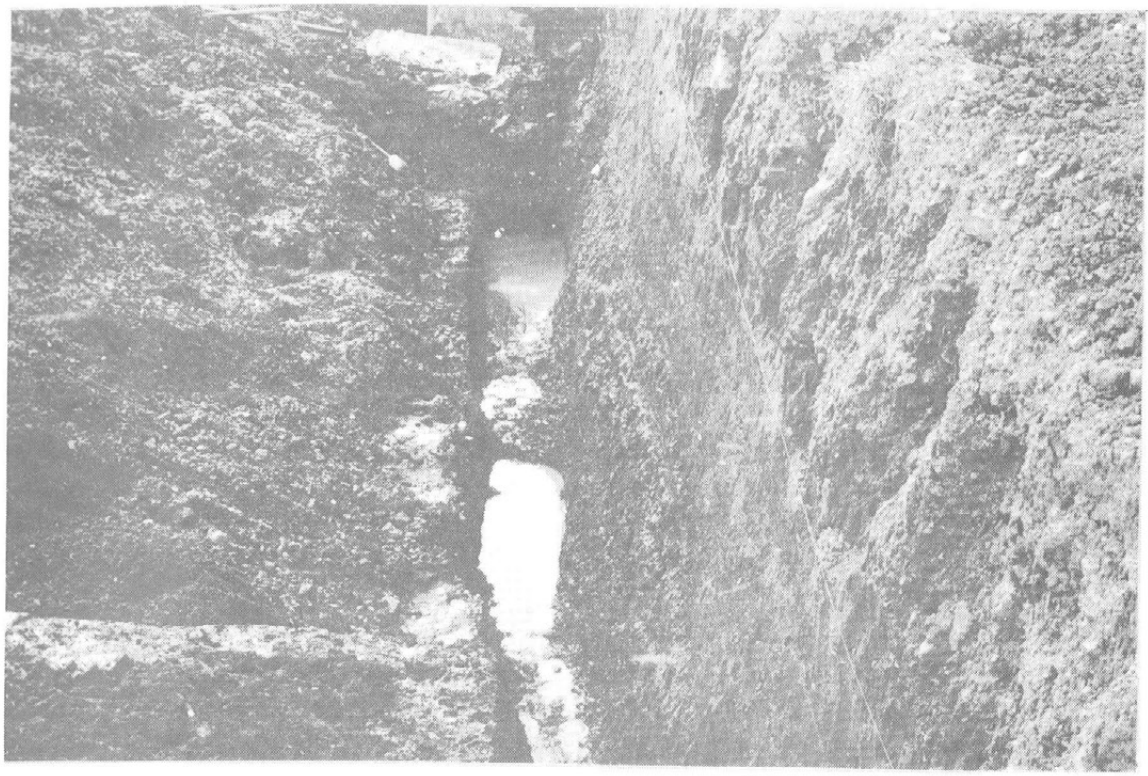
図版 8



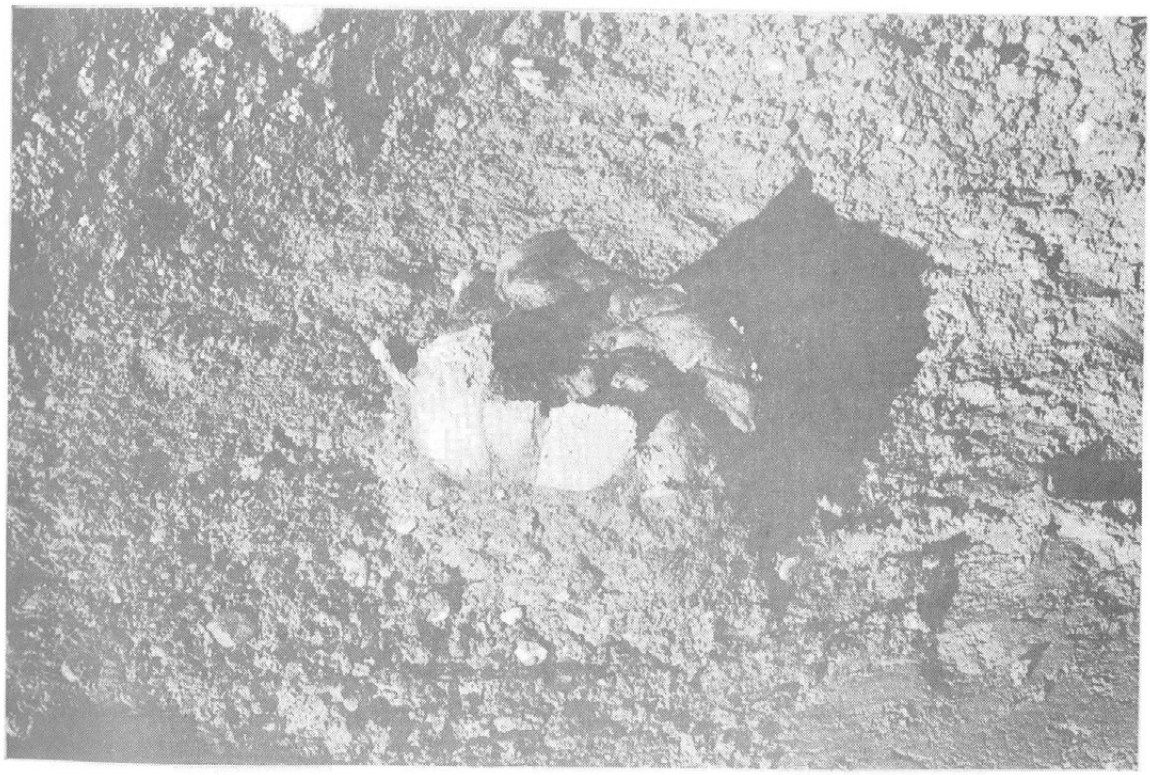
調査地区全景



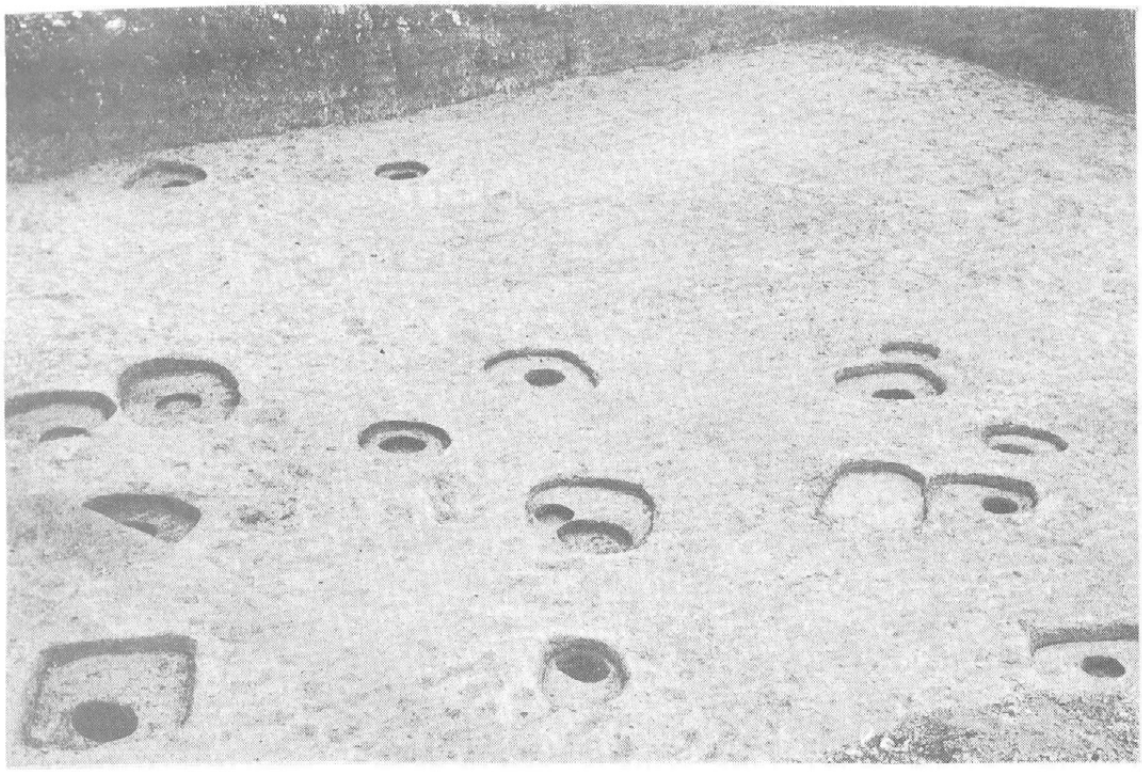
W－9トレンチ調査状況



6トレンチ調査状況

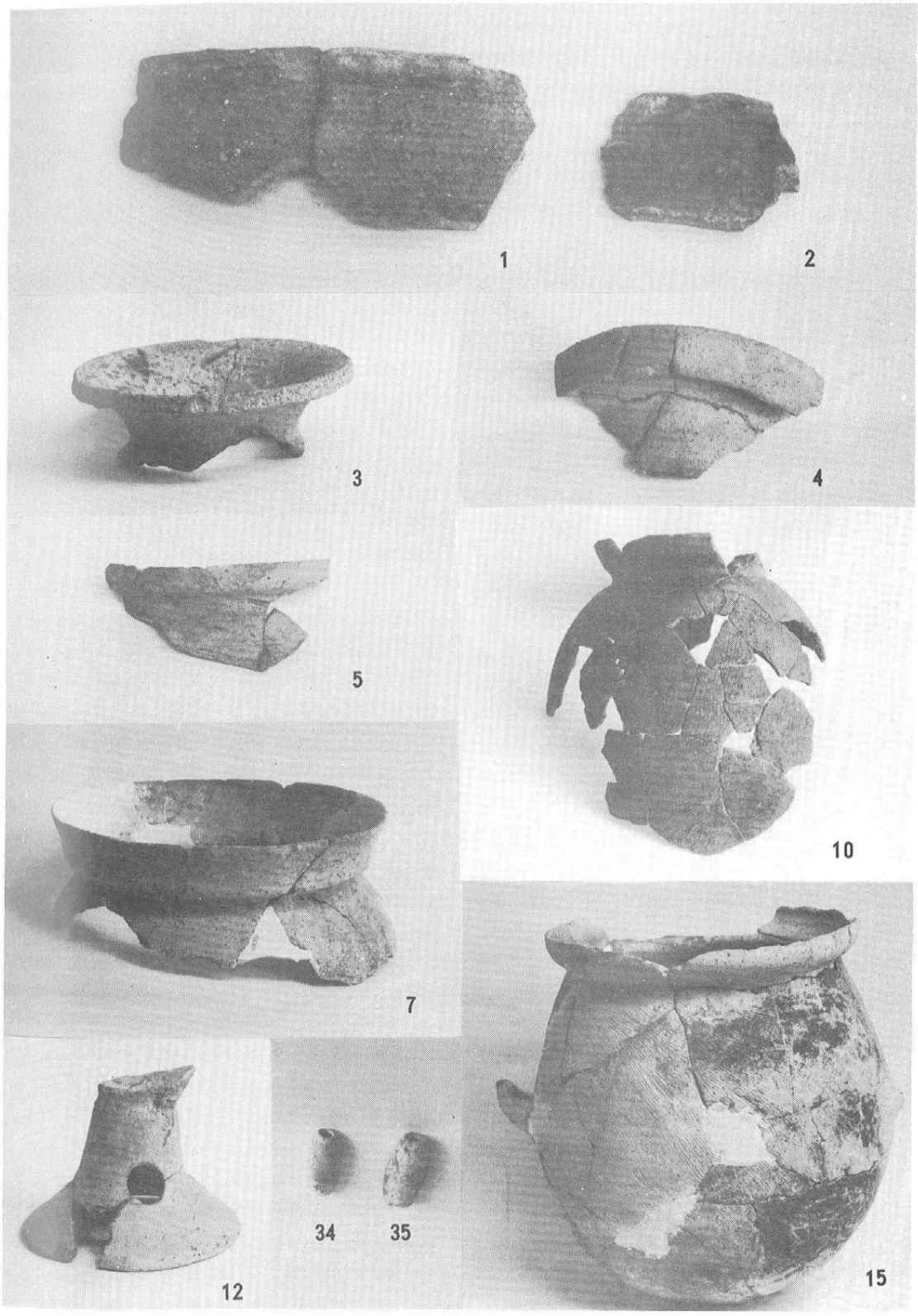


遺物出土状況

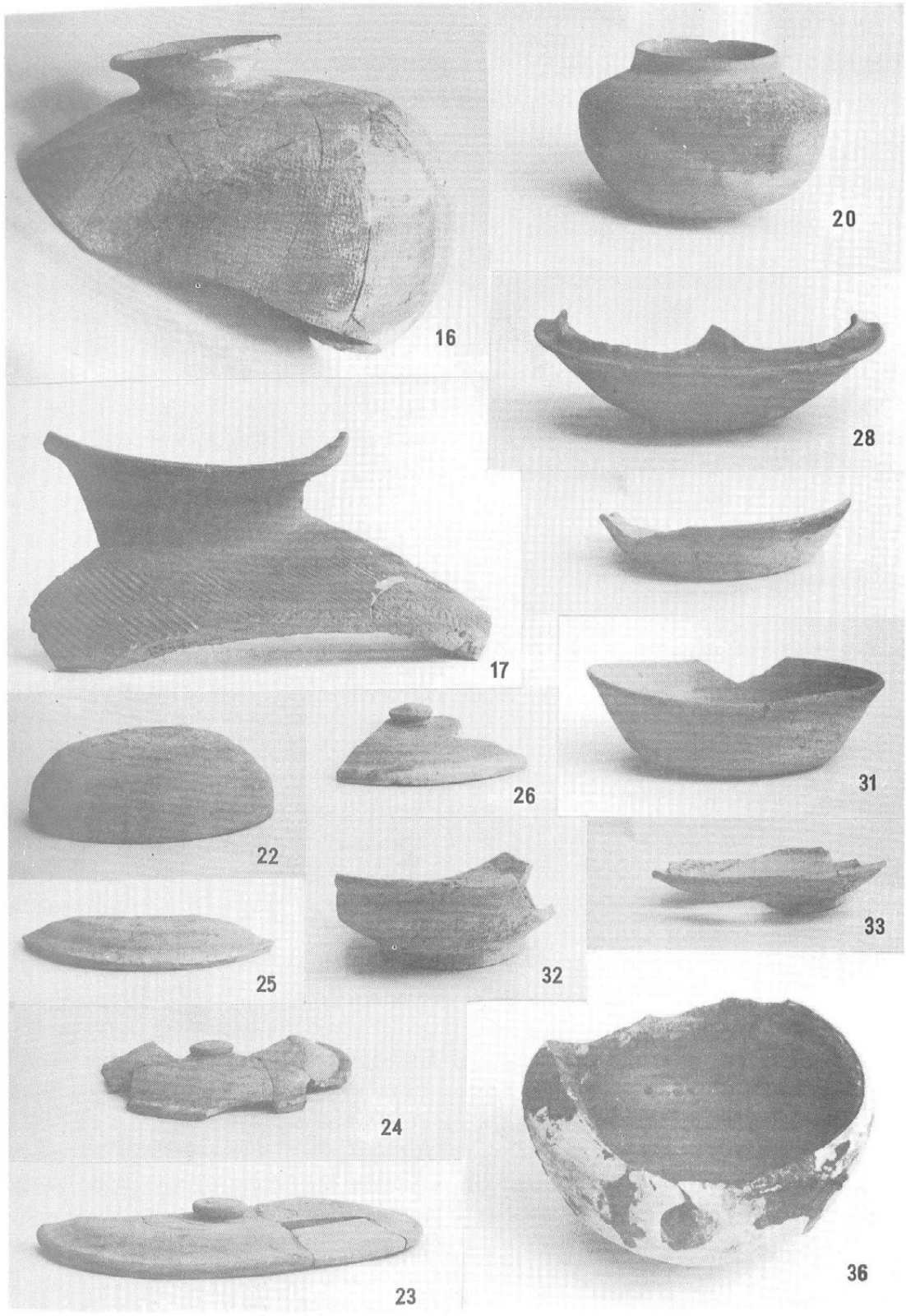


2トレンチ 総柱建物（西から）

2トレンチ 総柱建物（東から）



写真図版 4



写真図版 5